

巨大な陳旧性睾丸水腫の1例

埼玉医科大学泌尿器科学教室（主任：岡田耕市教授）

沼 秀親・坂本 修一・伊藤 浩紀
楠山 弘之・平賀 聖悟*・岡田 耕市

A CASE OF GIANT OBSOLETE HYDROCELE TESTIS

Hidechika NUMA, Shuichi SAKAMOTO, Hiroki ITOH,
Hiroyuki KUSUYAMA, Seigo HIRAGA and Koichi OKADA*From the Department of Urology, Saitama Medical School
(Director: Prof. K. Okada)*

A 58-year-old man visited the urological clinic in Prefectural Tohkamachi Hospital with complaint of swelling of bilateral scrotal contents. He had no history of fever, pain or difficulty of urination. Physical examination revealed a giant mass of adult-head size in right scrotum and left inguinal hernia of fist growth. Surgical extirpation of the right scrotal mass and left inguinal herniorrhaphy was performed and the mass was diagnosed as obsolete hydrocele testis and weighed 1,600 g. The excised hydrocele sac showed marked thickening and dark brown pus amounted to about 1,400 ml, which was negative in bacterial culture. Histological examination revealed partial deposits of cholesterol and calcification in tunica vaginalis with extremely atrophic testis and destructive spermatogenesis. The findings suggested the existence of long-term infection in hydrocele testis. The etiology and pathogenesis of this disease is discussed.

Key words: Giant obsolete hydrocele testis, Deposits of cholesterol, Calcification

緒 言

陰嚢部が巨大に腫大する疾患としては睾丸腫瘍、睾丸水腫、血管腫、外傷性血腫、尿管腫などが知られており、最近われわれは成人頭大に増大した右陳旧性睾丸水腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：58歳，男性，農業

初診：1985年7月23日

主訴：右陰嚢部の成人頭大腫脹および左陰嚢部の手拳大無痛性腫瘍

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：約20年前より右陰嚢部の手拳大腫瘍に気付いていたが放置した。同時にその頃より左外鼠径ヘルニアを指摘されていた。右腫瘍が徐々に増大し、成人頭大を呈するようになったため、1985年7月23日新潟

県立十日町病院泌尿器科を受診し、睾丸腫瘍の疑いで同時入院となった。この間、発熱、局所の疼痛、排尿困難などはまったく自覚しなかった。

現症：体格中等大，栄養状態良好で胸腹部理学所見に異常はなかった。右陰嚢部腫瘍は成人頭大で重く、皮膚との癒着は存在せず、境界鮮明、辺縁は平滑で硬く波動性、透光性とも認められなかった。また睾丸、副睾丸を触知せず、精索には異常な所見はなかった。陰茎は埋没していたが、触診上腫瘍との区別は明確であり、また左陰嚢内容は腸管であった（Fig. 1）。直腸診では前立腺は正常所見を呈した。

入院時検査成績：全検血，血液生化学，腫瘍マーカー血沈および尿所見に異常はなく，レ線検査で胸腹部単純および IVP などにも異常は認められなかった。超音波検査で右陰嚢部腫瘍は低エコー性，嚢腫状で粒子性の内容物を多量に認めたが，睾丸，副睾丸は不明確であった。

以上より陳旧性の右睾丸水腫が強く疑われたが，辜

* 現：東海大学医学部移植学教室 I



Fig. 1. 成人頭大の右陰嚢部腫瘍と左外鼠径ヘルニア・陰茎の完全な埋没を認める。



Fig. 2. 摘出された右陰嚢部腫瘍 (重量 1,600 g).



Fig. 3. 同腫瘍の剖面・黒褐色の膿汁を含み、液量 1,400 ml.

丸腫瘍も完全には否定できなかつたため、同年 8 月 3 日硬膜外麻酔下に右高位腫瘍摘出術および左外鼠径ヘルニア根治術を行なった。

手術所見・右陰嚢部腫瘍は周囲組織から容易に剝離でき、精管には軽度の肥厚がみられた他ほぼ正常の所見を示した。

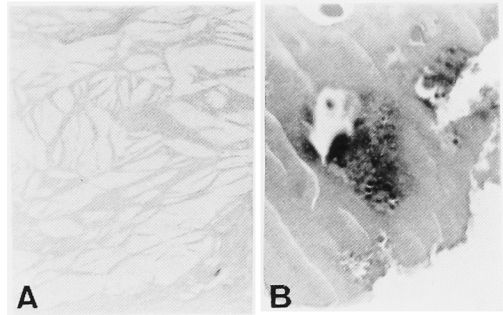


Fig. 4. 腫瘍壁の病理組織像：A. コレステロールの沈着所見 (H.E×200). B. 一部に石灰化を認める (H.E×400).

Table 1. 巨大陳旧性塞丸水腫の本邦報告例.

症例	報告者	発表年	年齢	患側	摘出重量	内容液量 (ml)	細菌
1	松本 ¹⁾	1957	77	右	直径 20 cm 周囲 52 cm	2000	—
2	山本 ²⁾	1958	—	—	—	—	陰性
3	塚本 ³⁾	1960	70	右	12×8.5×7.5 cm	1700	—
4	高野 ⁴⁾	1977	85	右	—	2422	—
5	岡 ⁵⁾	1984	89	右	成人頭大	1000	—
6	自験例	1985	58	右	1600g	1400	陰性

摘出標本：摘出物は重量 1,600 g で表面平滑、弾性硬で (Fig. 2)、その剖面は硬く肥厚しており、睾丸および副睾丸は肉眼的には確認できなかった (Fig. 3)。内容液は黒褐色で膿汁様を呈し、その量は 1,400 ml に及び、一般細菌、結核菌培養とともに陰性であった。なお、内容液の鏡検および生化学的検索は行っていない。

組織学的検査 腫瘍壁の一部に睾丸が圧迫萎縮された状態で見出され、造精能は認められなかった。また壁への炎症細胞の浸潤は乏しく、全体に線維化が高度でコレステロールの沈着および石灰化を一部に認め (Fig. 4A, B)、慢性炎症が長期間にわたったことが強く示唆された。

考 察

陳旧性の塞丸水腫は日常よく遭遇するかもしれないが、巨大となると稀で、検索したかぎりでは自験例を含め本邦文献上 6 例の報告があるにすぎない (Table 1)。6 例中 5 例までが年齢 70 歳以上で、自験例のように 50 代の症例はきわめてめづらしいといえる。患側は記載のある全例で右側であった。内容液量は最高が 2,422 ml で、以下 2,000 ml, 1,700 ml, 自験例の 1,400 ml, 1,000 ml であった。色調については暗黒褐色のものが多く、細菌培養については記載のある自験例を含む 2 例では陰性であった。また睾丸は報告例の

大部分で圧迫萎縮に陥っており、精子形成能は認められないようである。

自験例の組織所見で被膜中にコレステロールや石灰の沈着が一部に著明に認められた点は、フィラリア症による睾丸水腫^{6,7)}の所見とも一致を示したが、本症に特徴的な精管の結節や生活歴を認めなかったことから否定的である。慢性炎症が長期間に及ぶとコレステロールや石灰の沈着を生じることがすでに指摘されており⁸⁾、自験例は不明の原因により睾丸水腫が感染性となり、長期間のうちに鞘膜にこれらの変化が認められるようになったものと考えられる。岡ら⁹⁾は67年前の鈍的外傷が誘因と思われる巨大陳旧性外傷後の睾丸水腫症例を報告し、同様の機序で石灰化を認めたとし、コレステロールについては、鞘膜内での出血性変化があたかも静脈瘤壁での変化と同様にコレステロールの沈着をもたらしたのと考えられる。

自験例の場合、発熱や疼痛の既往に乏しく、膿汁様液の細菌培養は陰性であり、また鞘膜内の細胞浸潤はほとんど認められなかったことから、感染が長期間のうちに限局し、自然消滅したものとも考えられる。また睾丸水腫に対する穿刺の既往はまったく無かったが、他の報告例では、穿刺などの外因もみられるので、睾丸水腫が発見され、穿刺によって治療が行なわれた後は注意深く観察を行なう必要があると考えられた。

結 語

58歳の男性にみられた巨大な右陳旧性巨大水腫症例を報告し、若干の文献的考察を行なった。

文 献

- 1) 松本忠夫・手束 尚：巨大なる陰囊水腫の1例。日泌尿会誌 48：410, 1957
- 2) 山本 治：巨大陰囊膿腫の1例。日泌尿会誌 49：387, 1958
- 3) 塚本俊雄：コレステロールの析出を見た陳旧性陰囊水腫の1例。日泌尿会誌 51：1151, 1960
- 4) 高野 崇・森下英夫：巨大陰囊水腫の1例。日泌尿会誌 68：999, 1977
- 5) Oka M, Nakashima K and Hamada Y: Posttraumatic hydrocele with calcification of the tunica vaginalis. Nishinohon J Urol 46: 941~943, 1984
- 6) 桜井正樹・山崎義久・山川謙輔・ほか：フィラリア症と思われる陰囊水腫の1例。臨泌 39：621~623, 1985
- 7) Lichtenberg F and Lehman JS: Campbell's Urology, 4th Edition, 624, 1978
- 8) Kaufmann E: Lehrbuch Der Speziellen Pathologischen Anatomie, 2. Band, 1. Teil, 62~63, Walter De Gruyter & Co., 1957

(1986年9月1日受付)